

Report レポート

ライフステージに応じた支援を目指して

鹿児島県・ガーデンキッズトリア チーフ保育士
北園さやか

I はじめに

社会福祉法人落穂会が児童発達支援事業を始めて、約3年半が経ちました。その時、その時の保護者の声やニーズに寄り添った支援ができるよう試行錯誤し、今の児童発達支援のスタイルができました。

「可能な限り、地域の中で伸び伸びと」を念頭に、支援のあり方、ライフステージごとの支援について考え、実践報告したいと思います。

II 事業所紹介

児童発達支援事業所「ガーデンキッズセルク」

(以下、セルクと略)

平成24年7月1日開所 定員20名

活動時間 午前の部：10時～12時（母子参加・分



ガーデンキッズセルク



歩路



ガーデンキッズトリア

III S君の事例 ～児童発達支援から幼稚園へ就園～

ことばの遅れ、落ち着きのなさ等により児童発達支援を利用し、幼稚園就園を迎えたが、幼稚園生活でのトラブルが多く、一度、幼稚園を退園することになったS君。毎日療育に通うようになり、少しづつ落ち着きが見られるようになり、再度、幼稚園への就園を試みる。移行するまでの対応と、母親の葛藤、迷いを支えるべく、保護者支援の視点も踏まえ事例を紹介したい。

年齢：6歳（平成21年5月生まれ）

診断名：知的障害（療育手帳 未所持）

主訴：落ち着きがないことや、ことばの遅れが気になり、3歳児健診の際、保健師に相談し、療育を勧められる。

① 支援の経過

①ガーデンキッズセルク

利用期間：平成24年7月30日～平成25年3月21日
(週2～3回利用)

児童発達支援は初めての利用。登園開始時は3歳2ヶ月。体を動かす遊びを好んでいた。他児に対して、突き飛ばす、叩くなどの行為が多く、動きの多さや衝動性の高さが見られる。また、女性職員、母親に対して、粗暴であった。女性職員がモデルとなり、女

性職員のS君への関わり方を母親に見てもらい、適切なやりとりが増えるようサポートしながら、母親とS君の関係作りに繋げるようにする。

②児童発達支援センター歩路へ移行

利用期間：平成25年4月1日～平成26年3月31日
(週5回利用)

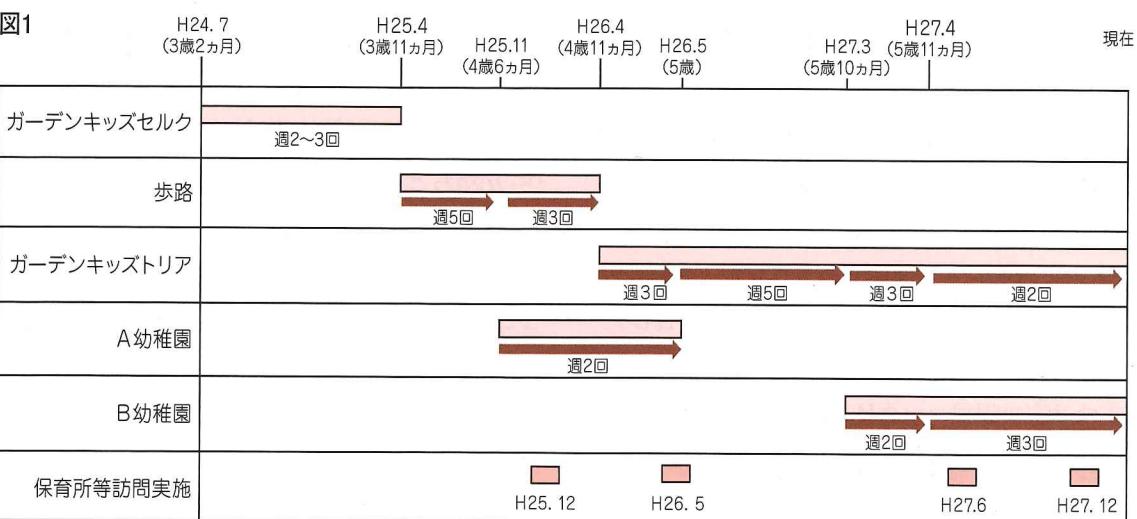
登園開始時3歳11ヶ月。セルクでの療育を経て、体力面や将来の幼稚園への就園を見据え、療育時間の長い歩路（1日4時間）へ移行する。

突発的な動きや、他児とのトラブル（突き飛ばす・叩く・引っ搔く）が絶えず、見守りが必要であった。運動量の確保のため、マラソンを実施。他児と一緒に積極的に参加している。思いっきり身体を動かすることで、次の活動へ落ち着いて取り組むことができるようになった。

昼食後より、テンションが上がりやすくなり、動きが多くなる。少人数での環境設定をし、身体を動かせる時間の確保に努める。また、机上の活動も好むようになり、設定された時間では落ち着いて参加することができるようになる。

③A幼稚園へ就園

母親が幼稚園への就園を希望し、幼稚園探しを始める。A幼稚園にS君の状況を伝え、A幼稚園の対応として加配職員を配置すること、併行通園をすること



(週2回幼稚園へ通園)とのことで平成25年11月、就園が決定する。事業所としては、他児とのトラブルも考えられたため、コミュニケーション面の心配をしていたが、母親の希望を尊重し、併行通園を実施する。

保育所等訪問支援を実施する。落ち着いて着席し、お遊戯等、積極的に取り組む姿が見られる。一方、他児につられ、走り回ったりすることや、他児の使っていた玩具が目につき、それを取り上げて踏んだりする姿が見られる。子ども同士でのやりとりは難しく、S君の突発的な動きに戸惑う園児もいた。自由保育中心の幼稚園であったため、自分自身で行動を調整することが難しいS君にとっては、落ち着いて1日を過ごすには難しい状況であった。

④ガーデンキッズトリア移行

利用期間：平成26年4月2日～現在（週3回利用）

登園開始時4歳11ヶ月。弟がセルクを利用していたこともあり、母親の負担（送迎）、時間等を考え、セルクの近隣にあるトリアへの移行を提案し、移行が決定する。

4月当初、環境の変化もあり、落ち着かないようすであったが、支援員との関係ができたこと、言語聴覚士のアドバイスも功を奏し、言葉での意思伝達（単語、指差し）等が増えたことにより、落ち着いて過ごせる時間も増え始めた。他児と関わろうとする姿も見られ始めた。支援員が介入することで、言葉をかけることはできるが、遊びが持続することは難しく、見守り・介入が必要であった。

昨年度に引き続き、トリア（週3回）、幼稚園（週2回）の併行通園を実施する。A幼稚園では加配職員がついているものの、園の現状として、S君のみの支援にあたることは難しく、他児とのトラブルも多い状況であった。

母親の気持ちとして、母親が幼稚園に行った際、他児より「S君、叩いてくるよ」「S君が来たぞ」等の言葉を聞き、つらく、悲しい気持ちになることが多々あり、幼稚園に通わせることに対して、不安な気持ちが

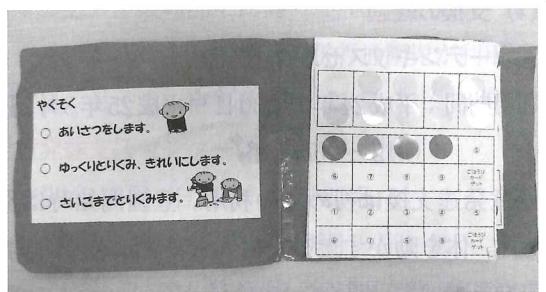
常にあるようであった。幼稚園でのようすを直視した母親は、今のS君の状態では、幼稚園生活が厳しい面があると判断し「療育に専念したい」と相談がある。

⑤A幼稚園を退園する

母親からの要望もあり、保育所等訪問を実施する。トリア支援者からも母親の思いを伝え、話し合いの末、退園に対する了承を得て、平成26年5月末で幼稚園を退園する。

⑥トリアへ毎日通園する

1日を通して、落ち着いて過ごすことができる目標に、運動量の確保と、クールダウンに繋がる活動として、S君の好きな取り組み（掃き掃除・コップ洗いなど）を活かした「お仕事カード」（写真）を取り入れる。ポイントを貯め、「ごほうびカード」と交換するような手続きで取り組む。



S君のごほうびは、休みの日に外食に出かけることや母親に頭をなでてもらうなど、スキンシップを求めるようなものであった。昼食後、気分が高揚しやすくなることが多いため、昼食後の自由時間に「お仕事カード」を取り入れる。整理整頓が得意なS君も喜んで取り組む姿が見られる。

友だちと言葉のやりとりは難しいものの、追いかけっこや戦いっこを楽しむ姿がみられるようになる。

ADL面は概ね自立し、1日を通して落ち着いて過ごすことができるようになる。来年度、年長児ということもあり、平成26年11月頃より、保護者から、就園について相談がある。再度、トリア・保護者と共に、幼稚園への就園を考える。

⑦B幼稚園への就園に向けて

日頃より、保育所等訪問を通じて交流のあるB幼稚園について母親へ情報提供をする。B幼稚園は、設定保育中心の園であり、何をする時間かがはっきりしているため、S君にとっても過ごしやすいと考えられることを伝える。また、トリアからB幼稚園へ問い合わせを行い、S君の状況を伝え、受け入れについての確認を行う。

⑧当時の母親の葛藤

入園へ向け、体験入園を行う。幼稚園が受け入れ可能なことを保護者へ伝えるも、母親自身の迷いが大きく、入園へ踏み込めない状態が続く。母親の迷いの理由として、他児から本児が批判されないか、トリアに毎日通うことでS君が落ち着き安心できているのに、幼稚園へ通うことで自分自身の気持ちが落ち着かなくなるのではないか、があった。

降園時の引き継ぎの時間を活用したり、個別面談を重ねたりしながら就園についての話をする機会を設ける。また、保護者の不安感を軽減できるようにすると共に、後押しに繋がるよう支援する。必要に応じて、B幼稚園とS君の受け入れについて情報交換・情報共有をする。幼稚園とやりとりをした内容を母親へ伝えることで少しづつ前向きに捉えられるようになる。

⑨併行通園を開始する

平成27年3月より幼稚園：週2回、トリア（療育）：週3回での併行通園を開始する。

保育所等訪問を実施する。S君は新しい環境の中、戸惑うようすも見られるが、B幼稚園に通うことを楽しみにしている。担任教諭との関係もでき、指示に応じようとする姿が見られている。他児と関わりたい気持ちも強く、ちょっかいを出すような形になることもあるが、大きな集団の中でも、落ち着いて過ごすことができている。

母親はB幼稚園の担任教諭より、幼稚園でのようすをこまめに聞くことができ、安心できているようす。担任教諭から母親へ問い合わせや質問があった際、ト

リアの支援員に質問し、その返答を担任教諭へ伝えながら、その都度、解決できるようしている。入園前は、不安や戸惑いが大きかったが、再度、就園を迎えることができ、よかったです感じている。

⑩B幼稚園との関係作り

以前より、保育所等訪問支援にて、交流を深めてきたこともあり、連絡をとりやすい関係性ができる。担任教諭より、「療育でのようすを知りたい」など電話連絡があり、支援方法や関わり方について、こまめにやりとりしている。また、B幼稚園でのようすを把握することができ、情報共有に繋がっている。

S君の幼稚園生活での課題に寄り添い、よりスムーズに園生活が送れるよう支援することで、S君と保護者だけでなく、幼稚園との関係作りにも繋がっているようを感じている。

（2）今後の課題

他児とのコミュニケーション面について、より適切なコミュニケーション方法を身に付け、他児とのやりとりの充実に繋げる。また、スムーズな移行を目指すためには、ていねいなやりとり・引き継ぎは不可欠であると感じた。来年度、就学を迎えるため、S君が安心して学校に通えるよう、スムーズな移行を目指したい。

V まとめ

子どもたちの抱えている課題を療育の場だけで解決するのではなく、個々の持っている力を引き出しながら、可能な限り、地域とつながり、その中で伸び伸びと過ごすことができるよう、地域の幼稚園・保育所への就園を視野に入れ、今後も支援していきたいと考えている。

S君の関わりを通じ、一緒に考え、悩み、その時の保護者の気持ちに寄り添った支援が大切ではないかと感じた。切れ目ない、段階に応じた支援ができるよう、それぞれの事業所の良さを生かしながら、支援者として、事業所として成長していきたい。